

JIPAT

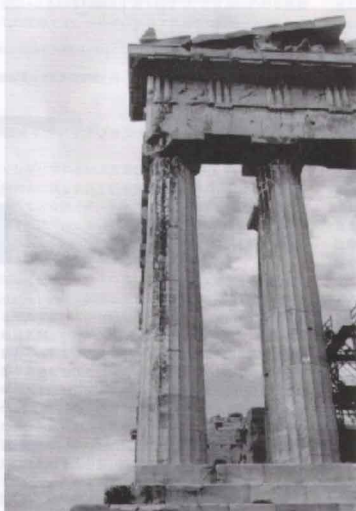
The Japan Interior Planners Association Tokyo

News Letter

CONTENTS

- 2.....センチのはなし
- 3・・特集「IPの世界」について 総論①
- 4.....公共施設② 事務所・オフィス③
- 5.....ホテル④
- 6.....IPEC21-2002

AUTUMN
2002
No. 25



パルテノン (アテネ)

■インテリア紀行

◆センチのはなし

アカンサスの葉を探しにギリシャに出かけた。
メジャーを持参したので、古代の建物やイスの寸法を計ってみた。驚くことに全てがメートルで割り切れたのである。一例をあげると、誰もが知っているミケーネ（写真）のライオン門を計ってみた。両側の柱の幅は65センチ、柱の高さは3m、まぐさは（横の梁）ひくいところで70センチ、一番高いところで1m、間口は2m90センチで、門の内側に門扉が在った形跡があり、その厚みが10センチ、門自体の奥行きは3m80センチ、紀元前1,600年の頃のセンチに出会い驚きの連続だ。その門をくぐり、バイドリアデス溪谷の急斜面にある予言の神アポロンの聖地にある階段状の劇場の石のベンチの高さを測った。

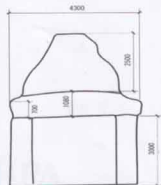


(ミケーネ・ライオン門)

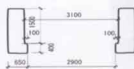
座面の総高は39センチで、座面の奥行きは30センチであった。考えるに座布団のようなものを敷いていたのではないだろうか。(ディテールを参照)

有名なナルテノン神殿のドリス式柱の縦溝の幅は23、深さは3であり、フルーティング（縦溝）は20筋。この時代の寸法は手のひら幅で、4パームが1フィートと計算されていたようだが、フィートで測量して、メートルに換算するとどうしても答えが合わない。では、いつメートルが使われるようになったのか疑問が湧いてきた。

ルイ十六世が在位していた18世紀のフランスは、今まさに革命がおきそうな風雲急を告げる時代。各都市では都市ごとに寸法単位がまちまちで、同じ品物が場所によってはサイズや重さが違うという現象が起こっていた。



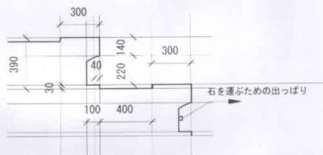
ライオン門実測図



一方イギリスでは長さのヤードを決めるのに、学者王と云われたヘンリー一世の肘の長さの二倍尺で決められ約92で、容積のガロンは後にエリザベス一世が決めたと云われている。そのため、それ以前にアメリカに移住していたイギリスの移民は以前のガロンを使っていたため今でもアメリカ「ガロン」とイギリス「ガロン」は違っているのはそのせいだ。

話をフランスに戻そう。寸法単位の統一の声が高まり、1790年ターレランの提案に基づき、いかなる国でも採用できる新単位制の設立を決め、パリ科学学士院がその作業を行うことになった。イギリス、アメリカの提携がどうしても必要であるとしたが、革命前夜のフランスに不信を抱き両国とも協力を拒んだ。

1792~98年にかけて、バルセロナからパリを通る子午線上に沿い、その延長線のフランス最北端のダンケルク間、地球全周の4000万分の1を1メートルとして、これを標準尺にして確定原器とした。



(劇場いすスケッチ図面)



ドーリス柱には台座はありません。

各単位は各国の国民感情を考慮して、ギリシャ語及びラテン語にとりとして、長さをメートル、面積をアール、体積をリットル、重量はグラムとして、メートルの分数を表すデシ(d)は1/10、センチ(c)は1/100、ミリ(mm)の1/1000、をラテン語から、倍数を表すデカ(D)は10倍、ヘクト(h)100倍、キロ(K)1000倍、これから先はコンピュータを御存知の方はメモリーで苦しめられたので親しみがある、メガ(M)は100万倍、ギガ(G)10億倍、テラ(T)は1兆倍、(teraはギリシャ語で怪物の意)と云うふうに

■インテリア紀行

ギリシャ語で表すようになった。

フランスでは1837年旧単位の使用が禁止されすべてメートルになった。日本は明治18年に加盟手続きを終えていたが、昭和37年に法律で実施された。

長々とメートルについて書いてきたが、古代建物は主にイギリスが発掘して、表示されている寸法はフィートであり、センチに置き換えるとかかなりの誤差がでる。もう一度有識者は採寸しなおせば面白い結果がでると思うのは、私だけだろうか。

(i & i インテリア総合デザイン室)



アカンサスの葉

■IPの世界掲載について

News Letter 編集委員会

JIPATも設立から7年をすぎ、いろいろと状況の変化にも対応しながら、運営をしてきました。昨年度より、IPEC21を開催し、IPの存在を世に知らせることもできてきました。

この「IPの世界」は設立の翌年、平成8年にIPの存在をアピールするために、日刊建設工業新聞の協力を得、「建築へ」という特集頁に週1回ずつ、23回にわたり掲載をした記事です。ややインテリア関係者に関わりが弱い

こともあり、インテリアプランナー自身を読んでいることが少なかったように思います。そこで、協会の記録として残すと同時に、会員の皆様にも読んでいただきたく思い、日刊建設工業新聞にお願いし、許可を得てニューズレターに掲載することとしました。紙面の関係で、12のテーマを二人の方に書いていただいたのですが、今回は上を4点掲載します。そして、次回に下を、その後順次、上数点、下数点と連載させていただきます。

■特集 IPの世界

◆総論インテリアプランナーの職能④

「インテリア」という言葉はいま、「住宅」や「建築」より一般の人に親しまれている言葉と言えよう。しかし、だからといって人々が「インテリア」の意味を正しく理解し、その役割を真に評価しているかという、それは全く別な問題のようである。方や「環境」という言葉も目に余るほど使われている。

先だって会った生態学の専門家が「環境」保護と言うと、すぐ「ゴミ」の話に短絡してしまおうと嘆いていた。そもそも、ゴミが汚すのは人間がつくった人工環境で、問題はその（人工環境）が、本来の環境である（自然環境）を壊していることにある。議論しなければいけないのはそこなのだが、なかなかそこまで話が及ばないということらしい。これは言葉に対するあいまいな理解が核心への議論の矛先を鈍らせてしまうという弊害の一つであろう。

NHKの「アジアからの発信」という特集番組でベトナムの産業が取り上げられていて、中年の婦人が竹かごに造花を挿した飾りものを造っている場面に「こんなインテリアをつくっています」とナレーションが入った。数日後、こんどは某産業新聞紙上で一流建設会社の重役が趣味の、ハードケーピング

栗山 正也

について「最近ではインテリアとして人気があり…」と語っている記事を目にした。

インテリアが（室内装飾品）と言う意味で使われている例である。

環境に比べれば「インテリア」に対する誤解など大した問題ではないかもしれない。しかし、地球環境の存続は日常的な生活環境の適切な営みの延長上にしかないことを思えば、そこを主に受け持っているのが「インテリア領域」で、そこが担う役割はますます重要になるであろう。手で触れ、足で踏みしめ、肌で感じ、視覚で、聴覚で、きゅう覚でとらえる生活の場、人々の生活に密着し、いやし勇気づける空間、その「生活空間」こそが「インテリア空間」なのである。

このように考えていくと、単純に「インテリア空間＝室内空間」では済まないようでもある。生活の場は建物の内部（いわゆるインテリア）だけで完結するものではない。内部から外部へ、そしてまた内部へと無限に連続的である。ハードビル法が施行されている。車いすでも無理なく利用できるような建物を造りなさいということで、これ自体は当然であり、むしろ遅すぎたといってもいい程だが、問題はビルができてそこからたどり着く道路が

■特集 IPの世界

整備されていなければ、また、交通機関の対応がそうならないなければならない。

都市環境を一度させることなど簡単にできるわけがない事もわかるが、分断された成り立たない生活の流れが、縦割りのその境界部分に様々な問題が生まれてきているのが

現況であろう。その縦割りの境界を横方向から風穴をあけ、生活の場としてつないでいくこと、すなわち生活の場を連続的にとらえ、総合化していく仕事、少しおおげさな言い方になったが、それこそがインテリアの専門家が担う役割だと考えるのだが。

(了：㊦終わり、㊧次号)

◆公共施設 ㊦

世の中には文化施設という建築ジャンルが存在する。何だかあまりピンとこないが、どうやら一般には劇場やホールを持つ施設をそう呼ぶらしい。私はこの文化施設なるものを設計することが多いが、常々これほど厄介な施設は無いと感じている。

インテリアの設計をする場合、住宅にしろオフィスにしろ、通常そこには明確に住み手、使い手の顔が見えている。ところが、これが公共建築、とりわけ文化施設となるとちょっと様相が異なってくる。

文化施設の場合、一般に施主は地方公共団体の場合が多く、当然そのとの打ち合わせで設計は進んでいく。ところが、いざ施設が出来て管理に当たるのは財団や第三セクターであり、仮に直営の場合でも、設計には全くかかわらなかった事務系の職員が当たることになる。一方実際に施設を使う人はどうかというと、観客としての一般市民であり、舞台上立つ役者や演奏家等々である。つまり住み手の顔が特定できず、どこを向いて設計してよいか雲をつかむような状態なのである。結果として、我々設計者が役者となり、観客となり、そして施設管理者となって、それぞれの立場を代弁しながら設計を進めることとなる。さまざまな角度からその力量が問われるのである。

ところで、一般に建物の設計は建築が全体を主導し、インテリアはそれを追いかける形で進んでいく。中にはオフィスや商業施設に見られるように、インテリアが全く独立

してされるケースもあり、まさにそこに我々インテリアプランナーの活躍の場が存在するわけであるが、文化施設の場合には、むしろ逆にインテリア主導型で進んでいくケースがある。これは、劇場を取り巻く客席や舞台といった大空間が、そのままある程度建物の外観形状を決定づけてしまうためである。

私は普段、文化施設の設計に当たり、建築家とインテリアプランナーの一人二役を演じているが、改めて振り返ってみると、インテリアプランナーとしての自分が、プロジェクトマネジャーとして、建築家としての自分をコントロールしていることに気がつく。これは先に述べた理由もあるが、もう一つは文化施設にとってインテリアがそれだけ重要な意味を持つことの証でもある。特に劇場部分のインテリアには、さまざまな性能が要求される。舞台が良く見え、良く聞こえるための機能性、不特定多数を収容する施設としての安全性、そしてなによりも観客に感動を与えるための意匠性等である。この意匠性については、観客が舞台上に集中するために、客席は極力目立たない方がよいとの理由から、客席全体を黒やグレーに塗りつぶした劇場が数多くつくられたが、私はむしろ、あの劇場で見たあの芝居、あのコンサートホールで聞いたあの音楽というように、舞台芸術と空間が一緒に

(了：㊦終わり、㊧次号)

◆事務所・オフィス ㊧

新宿三角ビル（通称）の設計に参加した。もう30年も前のことである。建物の建設に続きテナント設計をかなりのスピードでこなしていった。入居した会社は、いわゆるカタカナ名のものが多く、その後高度成長を支えた会社が多かった。それから四半世紀、世の中の動きにつれてテナントがめまぐるしく変わっていった。これらのテナントの変転につれて、オフィスの変更工事が急がれながら行われていた。年間工事量も膨大になった。ビルは世の中を包む容器であり、貸室部分は隅々まで使い尽くされた。まさにシェル&コア部分をのぞき、何回も工事が繰り返された。建築設計のほかにテナント設計の範疇（はんちゅう）の仕事がたくさんあることを知らされた。三角ビルのテナ

岩澤 昭彦

ント設計では、テナントの難しい設計要請を工夫しながらこなしていった。まだ借り手の力が強く、何でもできることはやってあげる時代であった。その後のビルラッシュでは貸す側の力が強くなり、テナントは標準仕上げのまま使用することが当たり前となった。

ところが、こうしたビルの貸方基準は外資系のテナントのなかでは評判は悪く、規制緩和の外圧から建設省が腰を上げ、建築物の仮使用制度の弾力的運用（平成9年3月31日付建設省住宅局指導課長通達）により、スケルトン竣工がやりやすくなった。シェル&コアからの設計は、インテリアアーキテクトの仕事である。しかし現在、建築を取り巻く事情を考えると、必ずしも外圧によってのみインテリアアーキテクト

■特集 I Pの世界

の仕事が顕在化したわけではないことがわかる。建築設計に多くのハードルが現れ、建築家だけでは建築をつくってはいけな時代になっているからである。つまり「以前に比べ建築の設計者が行う許認可などの作業が大幅に増加していること」「建築が大型化、複合化して建築家だけではできない多岐にわたる検討が必要なこと」「形のない建物の出現。地下街、大規模構築物が現れたこと」「内容が複雑化し、専門家にしか設計ができないインテリアの分野がはっきりしてきたこと」「病院、研究所、美術館、劇場、住居施設など建築空間に対する質の要請が顕著になり、デザインを含めてソフトな解決が要請されること」「店舗、レストラン、ホテルなどといった理由が考えられられる。また今後、省資源や環境への配慮からマスカラップ・アンド・ビルドが許されず、建物が安直に

は建てられない時代になること▽一方先の震災の教訓から、現存する建築の25%が建て替えを必要としていること▽今後惜地法の改正で、テナントの居座り等がなくなり、ビルオーナーがビルの用途を時代の要請に合わせて変えていける時代になること▽を考え合わせると、いよいよ建築構造100年、設備20年、インテリア10年の時代となり、きっちと考えた建物を、長く使い回すことが当たり前の時代となる。つまりベースビルを設計する建築家と、その内部の設計を受け持つ設計者の分化が必要となり、インテリアアーキテクトの力のふるえる時代となるわけである。

(了)②終わり、③次号)

◆ホテル④

日本のホテルの始まりは、明治期以後といわれている。日本が開国し、多くの西洋人を受け入れるためにつくられたということである。近年国際化の波とともに多くの日本人が、海外へ出かける。欧米のホテルを経験し、また国内のホテルの利用の仕方も様変わりしている。

ホテルはその立地や環境によって形づくられ、その土地に足を運ぶ利用者によって性格づけられてゆくものである。特に最近の都市ホテルは競合ホテルとの差別化を図り、利用者にとって快適性や機能性のみならず、さらなるアメニティの向上と多様化した利用者のニーズに新たな付加価値を加えるべく、施設の新鮮化、充実化を図っている。

ホテルのインテリアを考えるとき、一番手取り早いのは、自分が客の立場となってホテルに泊まり、その施設を利用し、肌で感じ、手で触れてみる。そして、様々な人の流れを観察してやることである。ホテルプロジェクトの中で、インテリアプランナーの仕事のかわり方、仕事の領域はその基本計画の段階から、深いかわりを持つことが多く、時には構造部分に検討を加えることも少なくない。

ホテルオペレーターの意図を理解し、機能面だけではなく、デザインの配慮に起因することが、アーキテクトとの相互の領域に相入れながら、前向きに検討を重ねていかなければならない。一方、インテリアプランナーが最も深くかわり合っていかなければならないのが、いわゆるFF&Eといわれる分野である。FURNITURE、FIXTURE、EQUIPMENTの略である。通常日本では、家具備品類、

古野欽一
特種照明シャンデリア等のデザイン無羽、カーペット、ファブリック(カーテン、ベッドスプレッド等)、アートワーク(絵巻、タピストリー、彫刻、アートフラワー等)、ホテルサイン、グリーン計画(屋内植栽)、ルームアメニティ、そしてユニホーム、食器のコンサル等々、多種多様である。これらのデザイン提案、製作監理、搬入取付コントロール、コストコントロール、時には海外調達、海外製作もある。

数年前、ヨーロッパのラグジャリーホテルの視察調査の機会を得た時のことである。いくつかのホテルを訪問した中で、特に印象に残ったのは、ロンドンのフォーシーズンズ系のホテルでのことである。リニューアル中の客室やその他の施設を見学し終わり、最後にミーティングルームでの質疑応答の際に、フォーシーズンズホテルのポリシーについて尋ねたところ、案内役のアシスタントマネージャーが「私たちは三つのPを大切にしています」と即座に答えた。三つのPとは▽PEOPLE=良い人間関係。ゲスト、スタッフ、デザイナー、建設関係者等▽PRODUCT=良い建物や家具調度品等▽FITNESS=相互の利益一で、「これらが良いホテルの基本であると考えています」とのことであった。

21世紀が間近に迫る今後、ホテルの成熟期を迎えるに当たって、インテリアプランナーの仕事の領域が拡大することを期待したい。そして、この三つのPを大切にしながら、21世紀のホテルづくりができれば幸いである。

(了)②終わり、③次号)

一編集後記一。長いこと発行が止まってしまいました。ひとえに編集者の責任です。御々にお詫びいたします。また、今年から各委員回の委員および委員長が代わりました。ニュースレターの編集委員も替わりましたので、次号から新しいメンバーによる新しい体裁のものとなります。ご期待ください。(下田記)

NO. 25

SUMMER
2002

News Letter

JIPAT
The Japan Interior Planning Association

東京インテリアプランナー協会

1420022 東京都品川区東五反田 5-25-19 東京デザインセンター 3F

Tel:03-3446-8860 Fax:03-3446-1417 Mail:info@jipat.gr.jp

発行人/協会長 中川誠一 編集者/情報委員会

印刷所/ミズノ印刷 Tel:03-3532-2731 Fax:03-2731-1821

IPEC 21

2nd INTERIOR PRO EX CO

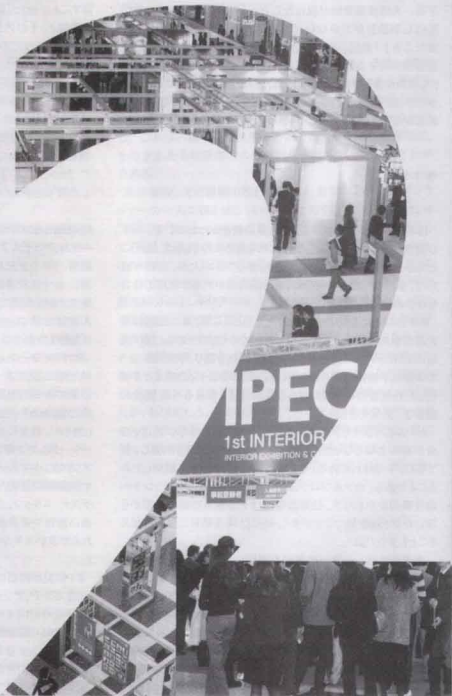
2002

OCT. 9 WED. - 11 FRI. 2002
TOKYO BIG SIGHT

2002年10月9日(水) 10日(木) 11日(金)
東京ビッグサイト西ホール

インテリアからの発信
健康な環境・II

インテリアのプロと企業をつなぐ国際展示会とセミナー
開催案内と出展募集



JIPA

Japan Federation of Interior Planner's Association